

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4504 号 2018.7.23 発行

【特派員発】 安楽死どこまで 認知症・老いの孤独...広がる「死の権利」要求 オランダ・三井美奈 産経新聞 2018年7月22日



- オランダの安楽死の要件**
- 患者が自発的に要求
  - 苦痛が耐え難く改善の見込みがない
  - 医師による十分な情報提供
  - 医師、患者が「他に代替手段がない」との結論に達する
  - 複数の医師による診断
  - 処置時に万全の医療ケアを行う

2002年に世界初の安楽死法を制定したオランダが、「死なせてよい生命」の範囲をめぐって揺れている。安楽死の広がりや、認知症や精神障害者、「人生はもう無意味」と訴える高齢者まで死の権利を主張するようになり、国内で「行き過ぎ」という懸念も高まる。論議の最前線を追った。

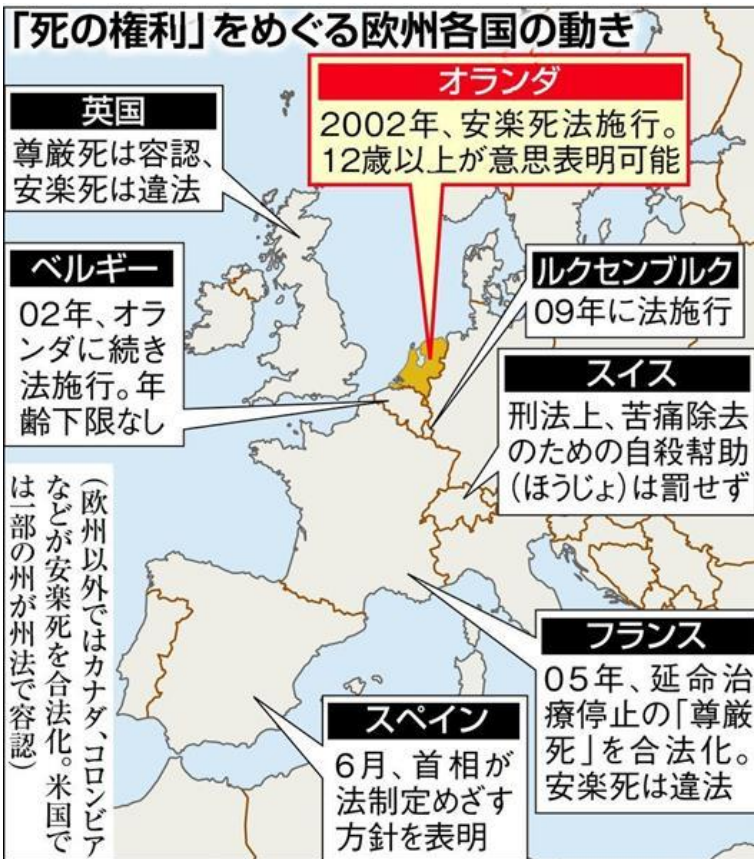
### ある認知症患者の死

「世界が毎日縮んでいく。本当は一人息子（17）の成長を見ていたかった」

遺書に苦悩がにじみ出る。5月、62歳のヤンヘンク・リーテマさんが安楽死の前日に書き残した。アルツハイマー病と診断されてから2年半。認知症が進む苦痛に耐えられず、医師に致死薬処方頼んだ。

遺書を受け取った姉のイナ・ハイマリーテマさん（70）は今年1月、弟から死の決断を告げられた。「『よだれを垂らし、他人頼みで生きるのには耐えられない』と言った。闘病の苦しみを見てきたから、反対なんてできなかった」と回想する。ヤンヘンクさんの写真を見せてもらおうと、眼鏡の奥のまっすぐな瞳が印象的だった。生真面目な性格がうかがえた。

病の兆候は57歳で表れ



病の兆候は57歳で表れ

た。物忘れがひどくなり、運転中、突然ハンドル制御ができなくなった。2年後に退職。外出先から帰宅できなくなり、水道を閉め忘れたこともあった。肉体的には年相応に元気だった。耐え難かったのは、「いつか完全に自己認識できなくなる」という絶望感だ。

昨年末、医師から安楽死の同意を得た。葬儀広告は自分で用意した。死の1週間前、イナさんや離婚した妻、息子を前に趣味のオルガンを披露し、別れを告げた。

### 日常会話の話題に

安楽死者は昨年、国内で6585人。法施行直後に比べ、3倍増した。死者約23人のうち1人が安楽死していることになる。

「同級生が『祖父が安楽死する』と言って学校を早退した」（17歳、高校生）、「末期がんの父の最期を家族で見送った。遺体の脇でワインを飲み、思い出話をした」（52歳、男性）—など、オランダでは日常会話の話題になるほど死の選択肢として浸透した。

安楽死とは、患者の要請に基づき、致死薬を飲ませるか注入するかして即死させること。延命治療をやめ、死期を早める「尊厳死」とは異なる。02年の法は医師が「耐え難い苦痛がある」「苦痛は治せない」などの要件を満たして患者を安楽死させた場合、刑法の殺人罪に問わないと定めた。医師は学者や法曹関係者で作る「安楽死地域評価委員会」に事後報告し、同委員会は要件違反の疑いがある場合のみ送検する。

法は安楽死を末期患者に限定せず、精神的苦痛を理由とする場合も認めている。ヤンヘンクさんの安楽死が認められたのは、このためだ。昨年、認知症を理由とする安楽死は169件にのぼった。

### 母の自殺幫助→起訴

目下、論議の的となっているのは「高齢者の死ぬ権利」を認めるべきか否かだ。孤独や老衰、「人生はもはや無意味」と感じる心の苦痛を安楽死要件と認めるべきか。5年越しの裁判で争われている。

被告のアルベルト・ヘリンハさん（75）は、08年に99歳だった母の自殺を幫助（ほうじょ）した罪で起訴された。



母は物忘れがひどくなり、老衰で身動きできなくなった。「介護を待つだけの人生は耐え難い」と安楽死を求めたが、医師は「病気ではないから」と拒否した。母はそれでも執拗（しつよう）に死を求め、ヘリンハさんが見かねて致死薬を渡した。

「母は若い頃、アフリカを単身旅行するほど活動的だった。『私の人生は終わった。自分で誇りを持って死にたい』と訴えた。私が娘と『家族のために生きて』と訴えても嫌そうに手を払った」と話した。

母は自殺を計画し、引き出しに睡眠薬をためた。薬学知識のあるヘリンハさんはそれを見て、「せめて安らかに死なせたい」と幫助を決めた。アフリカ勤務時代に入手したマラリア薬などを調査した。

母は薬入りヨーグルトをむさぼり、笑顔でベッドに横たわった。ヘリンハさんはその姿を収めたビデオを1年半後、「問題提起したい」とテレビで公開。事件は世間を揺さぶった。

15年、地裁は「苦痛から救うためのやむを得ない行為」として無罪判決を出したが、今年1月の高裁判決は一転して執行猶予付き禁錮6カ月の有罪。ヘリンハさんは最高裁に上告して争う構えだ。世論調査では54%が「無罪にすべきだ」と答えた。

「高齢者の自決権」論議はこれが初めてではない。政治家や医師、作家らが10年、「70歳以上には、自分で死の時を決める権利を認めるべきだ」と訴え、約10万人の署名を集めた。16年には保健福祉相がこうした高齢者の要求に応じるため、法改正の方針を表明。昨年の政権交代で国会の動きは止まったが、是非論は続いている。

### 自由の範囲とは

自分の生命は自分で決める—オランダ人のあくなき自由の欲求はこの国の歴史に根ざす。

17世紀、カトリック王政に抵抗して共和国として独立。宗教に縛られない自由貿易国

として成長し、世界金融の中心地となった。「他人に迷惑をかけない限り、個人の自由を尊重すべきだ」という気風は欧州でも特に強い。安楽死は1973年、病床の母を死なせた女医の裁判判決で容認要件の骨格が示され、約40年の国民論議が法に結実した。

しかし、元来の目的は、望まない延命や末期がんの痛みから患者を救うことだったため、容認範囲が拡大することへの批判も強い。地域評価委員会の元委員で、14年に抗議辞任したテオ・ブール氏（倫理学教授）は「国民は死を管理するという考えに慣れ、なし崩し的に安楽死が広がっている」と警告する。



### 104歳科学者 死を求めスイスへ

今年5月、104歳のオーストラリア人科学者デビッド・グドールさんが安楽死するためスイスに渡航した「事件」が世界的注目を浴びた。オランダの合法化を機に「死ぬ権利」を求める声は高まる一方だ。



欧州では、ベルギーとルクセンブルクも安楽死法を制定。スイスは刑法で自殺幫助を免責しており、医療手続きが不要なため、「安楽死ツーリスト」が各国から集まる。

グドールさんは102歳で大学から退職勧告を受け、「人生に生きる価値がない」と訴えてきた。渡航に付き添った安楽死支援団体の代表で豪州人フィリップ・ニツケ医師（68）は「医者として患者に『死なせてくれ』といわれているのはつらい。だが、医療の進歩でなかなか死ねない時代、彼のように介護で救えない高齢者は増えるはずだ。見て見ぬふりをすべきではない」と話す。グドールさんは死の前日に記者会見し、「私の死を機に、高齢者の自決権について考えてほしい」と話した。ニツケさんの支援団体の会員は米欧やカナダに約5万人。日本人も数百人いるという。



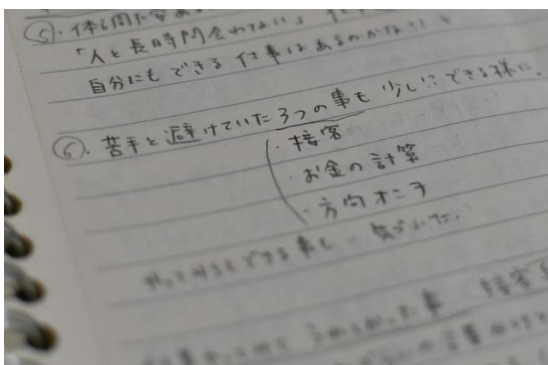
### 「公平な医療保険が前提」 オランダ安楽死地域評価委員会 ヤコブ・コンスタム委員長

オランダの安楽死法は、だれもが公平で高度な医療を受けられる保険制度があるから可能だ。貧富の差で医療や介護の水準が決まる国では、患者が「家族に迷惑がかかる」と考え、死を求める危険がある。

戦後生まれのベビーブーマーが70代を迎えた。高齢化の進展で、安楽死希望は今後も増えるだろう。だからこそ、要件違反がないかをチェックする透明な制度を維持せねばならない。

安楽死は患者の意思表示が前提になる。認知症患者でも判断力が残る段階で、医師の診断を元に将来を予想することは可能だ。「このままでは安らかに死ねない」という苦痛も、安楽死要件として認められる。「人生が意味を失った」という高齢者の死の要求は近年増えているが、現段階では認められない。今後、裁判で争われることになるだろう。

### 「話しかける」少しずつ...引きこもり20年の女性が接客 朝日新聞 2018年7月22日



女性のメモ。接客やお金の計算が「少し!?できる様に」と書かれている

初めて接客の仕事を始めた女性。腕時計はあえて文字盤の大きなものを選んだ。「いつかスマホも使っ



てみたい」＝京都市東山区

京都の大学を卒業し、20年以上引きこもった経験を持つ女性（46）がこの春、初めて人と向き合う仕事を始めた。新聞の集金に購読者宅を回る。決して考えられなかった「人に話しかける」仕事。緊張で手が震え、おつりを落としてしまうこともあるが、少しずつ手応えをつかんでいる。

「こんにちは」「今日は良い天気ですね」。お客さんの家に向かう途中、女性は自転車をこぎながら、ずっと「一人でぶつぶつと」発声練習をする。少しでも自然にお客さんと会話が始められるようにするためだ。自分の緊張を和らげる工夫でもある。

家に着いてもすぐにインターホンは押さない。電卓を取り出して実際にキーをたたき、おつりを入れたケースの小銭の位置を確認する。苦手なおつりの受け渡しのシミュレーションだ。「どうしてもお客さんの前で計算すると手が固まってしまうから」。準備体操のようにグー、パーを繰り返し作って手をほぐした後、お客さんと向き合う。

女性は高校時代、にぎやかなクラスになじめず、ストレスによる腹痛に苦しんだ。大学でも「おなか痛くなるのでは」という恐怖がつきまとい、孤立を深めた。30社受けた就職活動も全滅し、両親の住む自宅で引きこもりを続けた。

6年前、父親（74）にがんが見つかり、「このままだと共倒れになる」と目が覚めた。引きこもり支援団体の紹介で、週に3日のちらし配りを始めたのが昨年5月のこと。生まれて初めて受け取った給料の5千円札を何度も眺め「私も必要とされているんだ」と涙ぐんだ。今年2月、信頼する知人から「集金の仕事を手伝って」と頼まれ、悩んだ末に挑戦することにした。

最初はお客さんから1万円札を手渡されても、何と言えども正解なのか分からなかった。おあずかりします、いただきます、ちょうだいします？ 「社会人経験がないものだから、全然自信がなくて」。おつりを間違えれば信用されなくなると焦り、逆に計算ミスをしてしまうことも。暗い雰囲気だけは出したくないと、練習した「作り笑顔」で相手と向き合っている。

最近、自分から「手際が悪くてすみません」と言えるようになった。お客さんを待たせてしまっても、玄関先の空気が緩めば落ち着いて作業できる。長年、携帯電話が時計代わりだったが、2千円の腕時計を買った。女性にとって高い買い物だったが「お客さんの時間に合わせた仕事をしている」との自覚からだ。

女性のささやかな誇りは集金中に首から下げるプラスチック製の従業員証。手にしたとき、思わずうれしさがこみ上げた。20年以上にわたって自宅に引きこもっていた女性。学校以外、何の組織にも所属したことはない。「これを見ると、私だって社会の一員になれたんだ、と思えるから」

高齢化する引きこもりの人たちの取材を通じ、女性に初めて会ったのは昨年の夏。45歳で受け取った初月給について「いまも涙が出そうです」と目を細めて振り返る姿が印象に残り、同年8月27日付の記事で紹介した。

取材の際、女性はいつも事前に近況をノート数ページに整理してくる。「私は話がうまくないので」とはにかむが、誠実な人柄の表れだろう。昨年に比べ、会話中の笑顔がずっと増えた。私もすっかりうれしくなってしまった。（安倍龍太郎）

## 【相模原殺傷2年】被害者45人、公判呼称は「数字」 ...大半が匿名希望、アルファベットでは足りず

産経新聞 2018年7月22日  
平成28年7月に入所者19人が刺殺、入所者ら26人が重軽傷を負う事件が発生した相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」  
＝7月5日、相模原市

事件をめぐっては、公判前整理手続きで植松聖被告の弁護側が請求した精神鑑定が今夏にも終了する見込み



で、年内の裁判開始が視野に入る。植松被告は殺傷行為を認めており、公判では刑事責任能力の有無や程度が最大の争点になる見込みだ。

関係者によると、殺害された入所者19人に加え、重軽傷を負った26人の被害者計45人の大半が匿名での審理を希望。横浜地裁はすでに匿名の審理を認める決定をしている。

一方、被害者の総数が膨大であることから「被害女性1」のように数字を割り当てて呼称する案が検討されていることが関係者への取材で分かった。A～Zまでのアルファベット26文字では足りないための措置だという。

殺人事件では被害者は実名審理が原則だが、刑事訴訟法は、公表による悪影響が懸念される場合は秘匿できると規定。平成20年の東京・秋葉原の無差別殺傷事件の公判でも一部の犠牲者の氏名が伏せられた。

一方、東京都江戸川区で27年、女子高生を殺害し乱暴しようとした男の裁判では、匿名も検討されたが、遺族が「何も悪いことをしていない娘の名前を隠す必要はない」として実名で審理された。

今回の事件では、一部の被害者が実名での参加を希望しており、匿名と実名が混在することになる。

## 心の傷いまだ癒えず、職員も家族も やまゆり園事件2年 岩堀滋、田添聖史



朝日新聞 2018年7月22日  
入所者が殺害された事件から2年を迎え、語り合う（手前から）「津久井やまゆり園」の山田智昭支援部長、守民夫総務部長、入倉かおる園長、「津久井やまゆり園みどり会」の大月和真会長、杉山昌明副会長＝2018年7月6日午前、横浜市港南区、仙波理撮影

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人の入所者が殺害された事件から、26日で2年になる。当日、園の職員や入所者の家族たちはどう対応し、

この2年間でどんな思いで過ごしてきたのか。園の今後は――。今月上旬、座談会で語り合った。

園からは、入倉かおる園長（61）のほか、山田智昭（ともあき）・支援部長（48）と守民夫・総務部長（47）が参加。家族会「みどり会」からは大月和真会長（68）と杉山昌明副会長（78）が加わった。「職員の間では、事件のことをあえて触れずに過ごしてきた。当時に戻ることがつらい」と入倉園長。途中、涙を見せる人もおり、いまだ「心の傷」が癒えず、多くを語れない様子も垣間見えた。

事件前の園では、職員を退職した後も障害者への差別発言を繰り返す植松聖（さとし）被告（28）の来訪を警戒していた。当日の未明、逃げ惑う職員から園の幹部に一報が入り、「植松が来た！」というLINEメッセージが職員間で飛び交った。

「目の前の負傷者の救護で精いっぱいだった」と山田さんは振り返る。集まってきた職員と協力しながら、起き出したパジャマ姿の入所者を、次々と異変のなかった体育館に連れて行った。

大月さんや杉山さんら家族も次々に園に集まり、安否の問い合わせ対応に追われた。園内の床には血が残り、警察官や救急隊員らでごった返す大混乱。杉山さんは「我が子の安否を確認したくて来園したり、電話をかけてきたりした家族に対応したことがつらく、悲しかった。一生忘れられない」。

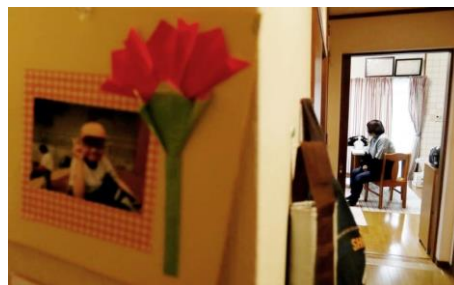
## 自立と明るい未来信じ 自閉症の息子 佐世保の施設に 7月22日 親子の日

長崎新聞 2018年7月22日

親がいなくても自立した生活ができることを願い、自閉症を抱える息子と別々に暮らす

母親が佐世保市にいる。元村未希（46）は、中学3年で長男の智輝（14）を長崎市内の入所施設に預け、1年3カ月余りが過ぎた。会えない寂しさに押しつぶされそうになりながら、少しずつ前に進んでいる。7月22日は「親子の日」。

佐世保市内の公営団地。玄関や部屋の壁を数十枚の写真が埋める。幼少のころから最近のものまで、撮影時期は幅広い。「智輝の存在を確認しながら毎日生活している」。未希はそう言って写真に目をやった。壁に智輝（仮名）の写真飾っている部屋で、未希（仮名）は息子の成長を願っている＝佐世保市内



31歳で妊娠。シングルマザーとして生きることを決めた。息子が周囲の子と違うと気付いたのは2歳のころ。言葉も発しないし、歩かない。3歳で自閉症と診断された。「そうなんだ」。個性と捉え、特に気にしなかった。悩むことはあったが親一人子一人。精いっぱい愛情を注いできた。

智輝は市内の特別支援学校小学部に入り、自宅からバスで通った。日曜は「お出掛けの日」。路線バスに乗って商業施設に行き、昼食を取って帰るのが“ご褒美”だった。

しかし、次第に息子のバスへの「執着」が強くなる。小学2年のとき、目を離れたすきに1人で乗り込み、警察官に保護された。その後も行動範囲は広がり、未希は見失わないように付いていくのが精いっぱいになった。朝が来るのが怖くなり、心と体は擦り減った。「このままでは共倒れしてしまう」。中学2年になる春、長崎市内の入所施設に入れた。

独りぼっちの食卓と寝室、自分だけの洗濯物一。涙があふれる日々が続いた。「強い母親にならないといけない」。自らを奮い立たせた。少しずつだが心は落ち着いてきた。

息子に会えるのは、クリスマス会や運動会、授業参観など年に数回ほど。同級生とは仲良く過ごしているようで、升目の中に文字も書けるようになった。少しずつだが成長していると感じる。

未希は「何でもしてあげようと必要以上に手を掛けていた」と一緒に暮らしていたころを振り返る。「親はいつまで生きているか分からない。私がいなくなっても普通に生活できるよう、少しでもできることが増えていけば」

今を乗り越えることができれば、智輝に明るい未来が開けると信じている。

＝文中仮名、敬称略＝

## こころの天気図 暑さが招く精神不調＝東京大教授、精神科医 佐々木司

毎日新聞 2018年7月22日

とにかく暑い。

いつもなら「運動しましょう、歩きましょう」と勧めている患者さんにも、今は「この暑さですから無理をしないで」としか言いようがない。暑さによる脱水を心配して尋ねてみると、皆さん、水分補給は心掛けているのだが、塩分補給は忘れて人が多い。中には「血圧が高めなので塩分摂取は控えている」と答えた人もいたが、暑い夏は汗で塩分が大量に失われるので、水分だけでなく塩分補給も必要だ。

「でも、この話って『メンタル』とは無関係では？」と思ったら、大間違いだ。汗で塩分を失ったのに塩分補給せず水分だけ取っていると、血液の塩分濃度が低下する。これは「低ナトリウム血症」と呼ばれる状態で、吐き気、頭痛のほか、倦怠（けんたい）感や無気力などメンタル面の症状も表れる。私の外来でも、暑さが本格化した先週は、だるさや無気力と吐き気を訴える患者さんが多かった。気候と関係があったのかもしれない。

なお、重度の低ナトリウム血症では、意識が混乱し錯乱状態になることもある。研修医の頃、そういう患者さんを受け持ったことがある。

「メンタルの症状だから心が原因」と早合点してはいけない。体の不調が原因の場合もある。暑い夏には低ナトリウム血症のほか、やはり水分とともに失われがちなビタミンB1など水溶性ビタミン不足も起こりやすい。熱中症にも要注意だ。どれも無気力や倦怠感がよくみられる。

水分・塩分は飲酒でも失われる。アルコールは利尿作用が強いからだ。夏は冷たいアルコール飲料の消費が増すが、大量に摂取すると、暑さを吹き飛ばすどころか、かえって倦怠感が強くなる。

メンタルの症状が体の問題で起こるのは、夏に限らない。例えば、だるさや意欲の低下は、貧血や甲状腺機能障害などでもよく表れる。低ナトリウム血症もそうだが、これらは血液検査などで比較的簡単に見つけることができる。

最近では、食生活の偏りによるビタミン不足も問題となっている。暑くて食欲がなくなり、面倒だからと主食だけだったりカップラーメンばかりだったりの食事をしていると、神経も弱ってしまう。もちろん、不規則な生活や睡眠不足の影響も大きい。

この夏は、サッカー・ワールドカップ観戦での夜更かしと猛暑が重なり、ダブルパンチとなった人も多いだろう。生活に十分注意して夏を乗り切してほしい

### 夏をうまく乗り切らないとメンタル面にも影響が

- 汗をかいても塩分を取らない
- 主食ばかりの食事ではビタミンが不足
- 暑い日にアルコールを大量摂取



### 家族4人「最低限の生活」にいくら必要？ 仙台市なら... 朝日新聞 2018年7月22日

仙台市で30代夫妻と小学生、園児の子供がいる世帯が「人前に出て恥ずかしくない」最低限の生活をするには月40万円が必要――。全国労働組合総連合東北地方協議会（斎藤富春議長）は、仙台市で暮らす30～50代の4人家族の最低生計費をまとめた。

東北6県の組合員に生計費の調査を依頼。約2100人が回答を寄せ、うち仙台市内分は500人ほどだった。「県内の最低賃金772円では、1日8時間働いても月12万円程度にとどまり生活できない」として、賃上げを訴えている。

住居や食事などに関する数百項目にわたる支出額を合算。食料などの消費量は下から3割分、物の所有率は7割分を抽出するなどして、憲法25条が保障する「健康で文化的な最低限度の生活」を送るのに必要な生計費を算出した。

その結果、30代世帯では月40万1千円（税抜き）。内訳は、住居費に42平方メートルの賃貸住宅の家賃5万9千円を計上。食費は10万3千円。昼は夫妻ともに弁当持参か自宅でとり、ともに月1回の会食や飲み会（4千円）に出席するとした。

子どもの教育費は、園児は私立通いで2万4千円、小学生は公立で2千円。車関係費は軽自動車1台を持ち3万2千円。被服履物費は約1万円の背広2着を4年着て1万3千円。月1回の日帰り行楽も必要だとして、5千円を計上した。

同様に、市内の40代夫妻と小学生、中学生の4人家族だと44万7千円。50代夫妻と首都圏の私立大学生、東北地方の高校生の4人家族で63万1千円となった。

国の全国消費実態調査（2014年）によると、2人以上世帯の消費支出は県内平均で29万6千円。10万円以上の差があるが、協議会は「最低限の生活に必要な額を見積もった結果。価値観は多様化しているが、人前に出て恥ずかしくない生活を基準においた」と説明している。（井上充昌）

## 東京五輪 マスコット 名前は「ミライトワ」

毎日新聞 2018年7月22日



東京2020マスコットデビューイベントに登場した、東京五輪のマスコット「ミライトワ」(左)とパラリンピックのマスコット「ソメイティ」=東京都千代田区で2018年7月22日午前11時半、渡部直樹撮影  
パラリンピックは「ソメイティ」

小学生投票で採用された2020年東京五輪・パラリンピックの大会マスコットの名前が22日、東京都内で発表された。市松模様の五輪は希望に満ちた未来を輝かせるようにと、「未来」と「永遠(とわ)」の言葉を掛け合わせた「ミライトワ」、触角に桜をあ

しらったパラリンピックは「ソメイヨシノ」と英語で力強さを表現する「s o m i g h t y」を組み合わせた「ソメイティ」と名付けられた。

大会組織委員会によると、2体のマスコットはデジタルの世界の住人でインターネットを通じて現実の世界とを行き来する設定という。

マスコットは最終候補3案に絞られた後、全国の小学生らによるクラス単位の投票を実施。対象となる約2万1000校の8割にあたる1万6769校から20万5755票が集まり、2月にフリーイラストレーターの谷口亮さん(43)の作品が選ばれた。

ミライトワは公式エンブレムに描かれた市松模様で伝統と近未来を表現し正義感が強く瞬間移動ができる特技を持つ。ソメイティは、マントで空を飛ぶことができ、普段は物静かだが誰よりもパワフルで超人的なパワーを発揮する。

名前は、1998年長野冬季五輪の4羽のフクロウのグループ名「スノーレッツ(SNOWLETTES)」を考案したネーミング専門会社に委託。投票の際の小学生へのアンケート内容や谷口さんの制作過程を聞き取ったインタビューから各30案の候補が出そろい、マスコット審査会の委員による投票で最終決定した。【村上正】

## <ありのまま自立大賞> 2氏を表彰 自立と支援努力輝く 河北新報 2018年7月22日 授賞式に出席した宮崎さん(左)と貝谷さん



社会福祉法人ありのまま舎(仙台市太白区)が、自立する障害者や支援者を表彰する第20回ありのまま自立大賞の授賞式が21日、仙台市青葉区であった。自立奨励賞に選ばれたNPO法人日本バリアフリー協会代表理事の貝谷嘉洋さん(47)=東京都=、脳性まひを抱えながらソフトウェア開発会社を創業した宮崎豊和さん(56)=同=の2人に表彰状が贈られた。

貝谷さんは筋ジストロフィーを患いながら単身で米国に留学。1999年に協会を設立し、障害者の音楽コンテストも創設した。授賞式では「微力ではあるが、活動を続けていきたい」とあいさつした。

宮崎さんは福祉施設法人向けに業務の効率化を支援するシステムなどを開発。「多くの人々の支えでここまで成長することができた」と語った。

授賞式には、ありのまま舎総裁だった故三笠宮寛仁さまの次女で選考委員長の瑤子さまも出席された。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行